

令和8年度木津川市総合教育会議 会議録

1. 日 時 令和8年7月30日（木）
午前 9時30分 開会
午前 10時50分 閉会
2. 場 所 木津川市役所5階 全員協議会室
3. 出席者 木津川市長 谷口 雄一
木津川市教育委員会
教 育 長 竹本 充代
教育委員 佐脇 貞憲
教育委員 皆川 麻紀
教育委員 智原 江美
教育委員 城野 智
事務局
企画戦略部
政 策 監 小川 良典
企 画 戦 略 部 長 茅早 祥一
企 画 戦 略 部 次 長 西村 和将
学研企画課課長補佐 森本 康太
教育部
教 育 部 長 平井 浩美
教 育 部 理 事 雑賀 孝博
教 育 部 理 事 古和田 信也
教 育 部 次 長 福井 俊英
教 育 部 次 長 東村 泰嘉
教 育 部 次 長 松井 学
社 会 教 育 課 長 中島 雄介
教育総務課課長補佐 齋藤 聡美

4. 会議の要旨

1 開 会

- (1) 市長あいさつ
- (2) 教育長あいさつ

2 報告

「木津川市立学校の教育職員に関する業務量管理・健康確保措置実施計画」
について

古和田教育部理事が資料に基づき説明した。

【説明】

計画策定の経緯について。令和7年6月に公立の義務教育諸学校等の教育職員の給与等に関する特別措置法が改正された。この改正により、これまで独自に取り組んでいた教育職員の業務量管理等について、自治体全体の課題として位置づけられ、計画の策定と総合教育会議での報告が義務付けられた。また地域住民や保護者に対して、教育職員の業務改善について周知し理解を求めることとなった。また今年度に全小中学校に設置を完了した学校運営協議会での協議事項でもある。計画を策定した後、着実な実行と改善が求められている。

計画の内容について。資料に基づき説明。教員業務負担軽減のため施策の推進や社会の意識の変化により時間外在校等時間は減少傾向にある。計画では数値目標を定めている。教育職員の働きがいと心身の健康を両立しつつ、教育効果を最大化できるよう取組を進める。

【質疑】

谷口市長：ストレスチェックの結果で、高ストレスだがストレス度が低いとなっている。この点について説明願いたい。

古和田教育部理事：時間外在校等時間の調査と合わせてストレスチェックも行っている。ここに掲載しているのは集団分析結果であり、その内容については、これから分析を進めていく必要があると考えており、現時点では明確な答えができない。今年度から計画に沿った取組を実施していくにあたり、正確な実態把握に基づく必要がある。今後分析を進めて、こういった結果になった理由を解明していく。

竹本教育長：ストレスは日常生活のいろいろな場面に関係する。授業、職場環境、量と質など、様々関係する。「上司からの支援」でストレス度が低いということは、業務量が多くても適切な支援があれば、業務に対するストレス度が低くなるということになる。総合的なストレス度と、個別の場面でのストレス度は違ってくる。ストレスチェックにはいろいろな項目がある。業務が大変でしんどい思いをしていても、同僚や上司からの支援があればストレス度は低くなり、孤立した状態ではないと考えられると思う。

谷口市長：職場環境でクーラーがなく暑いということもストレスになると考えられる。

竹本教育長：設備としての環境、人的な環境もあるので、一概に職場環境と言っても項目は多岐にわたる。

4月の教育委員会定例会でこの計画について報告し、委員から意見があった。その点について委員から発言をお願いしたい。

城野委員：4月の定例会は任命前であったため、現場での経験、心がけていたことを含めて発言したい。職場環境によるストレスは範囲が広い。学校管理職としては子どもたちが気持ちよく登校し、勉強や生活するうえで、教職員が過ごしやすい環境で仕事をするのが大事で、影響も大きい。管理職としてはそういった校内環境を作ることが大事なことになる。年々管理職の退職者が増加し、若い世代の管理職が増加している。担任教員と年齢的にも近く、理解しやすいのではないかと思う。教員が働きやすい学校を作る中で、チームで子どもたちを見るということを心がけていた。以前は「担任と子ども」であったが、現在は学年やブロック全体で対応する。しんどい思いをしている教員を見逃さない、孤立して悩んでも相談できないといった環境を作らない。そういったことがストレス度が低いことと関係していると思う。普段から様子を見て、声掛けをする。ストレスがたまらないうちに話を聞いたり、相談に乗ったりして問題を解消していけるということが、良好な結果につながっていると考えられる。

智原委員：ストレスチェックで高ストレス判定の教員への対応は何かしているのか。

古和田教育部理事：医師の面談の機会を用意している。

智原委員：教員の離職率が高くなっていると聞いている。周りの支援やチームとして支えていくことも大事。子どもの非認知能力の育成が重要と言われているが、教員の主体性やコミュニケーション能力を含めて、そういった力をつける機会があれば改善できるのではないかと考える。

2 意見交換

「地域資源を生かしたふるさと愛を育む教育について」

雑賀教育部理事が資料に基づき説明した。

【説明】

ふるさと学習の定義について。

ふるさと学習の目的としては、自己肯定感やシビックプライドをはぐくむ。地域の身近な課題に対して能動的に行動し解決策を導き出す探究的な学びの実践や社会性の育成があげられる。また小学校では「総合的な学習の時間」「生活科」を中心に各教科と連携し、中学校ではさらに発展させてキャリア教育につなげるなど、年間計画の中で位置づけて活動している。

課題としては、特定の教員が地元企業等との連絡窓口となることが多く、異動により連携が途絶えたり、新しい活動が発生することで、より教員の負担が大きくなることもある。

ふるさと学習については、様々なねらいを設定できるが、より系統立てた学習、学びの連続性も重要である。市長部局の持つリソースをより活用

できれば、子どもたちの学習も広がっていくのではないかと考えている。本日の意見交換では、市全体として子どもを育てていく視点からの議論を願いたい。

資料にある恭仁宮跡については、特別史跡昇格をきっかけに市内外で関心が高まっており、ふるさと学習をアップデートする良いタイミングであると思う。木津川市は文化財や自然、学研都市を含め多くの企業もあり、さまざまな視点でのふるさと学習を進めていきたい。

【意見交換】

谷口市長：ふるさと学習への思いについて聞きたい。

佐脇委員：以前テレビの番組で木津川市出身のタレントがふるさと自慢としてつくしのことを話していたことがある。このことからふるさと教育は必要であると思った。自分の住んでいる地域がどういうところか、教育の現場で話すことが必要であると思う。自分が子どもの頃には祖父母から家庭内でいろいろな話も聞いたが、現在は核家族が当たり前になり、そういった機会も減少した。そのような状況であるため、学校現場で話をする必要性を感じている。木津川市には文化財や先端技術を持つ企業もある。いろいろなことに興味を持てる地域であると思う。また木津川市では社会科の副読本を作成して、小学校3、4年生が活用している。地域を知るのに有効なものであり、内容の充実と合わせて、興味がある子どもはさらに深く学習できるよう基本的な部分に発展した部分を加えたりするなど、住民の方が買ってでも読みたくなるようなものにしていければ良いという思いもある。

智原委員：木津川市に居住して約30年になる。育ったのは別の地域だが、良い地域であり、うれしく思っている。木津川市内でも近鉄沿線の新しい地域と、歴史ある地域では特徴が違うと思う。市の名称でもある「木津川」を中心に発展してきた。木津川は大阪湾にもつながっているが、発展した背景など、子どもはそういった視点を持っていない。木津川市は自然と研究施設などが特徴的かと思うが、新しい住宅地の子どもたちは、研究施設などは親近感があっても、昔の話や文化財などには親近感が持ちにくいのではないかと思う。各小学校でそれぞれふるさと学習を実践した後で、交流することができれば、より郷土を知ることにつながるのではないかと思う。

谷口市長：歴史だけではなく、最先端の技術にふれること、それがふるさとでもある。史跡が近くにあり、それぞれの地域に伝統があり、そういったものを掘り起こしていくこともできると思う。改めて木津川を中心に据えて考えるということに気付かされた。

皆川委員：木津川市民になってまだ10年あまりであり、外から来た人という感じがする。木津川市に住むと決めた理由の一つは、自分の地元 に似た雰囲気であったことがある。生まれ育った土地への地元愛は

大人になっても続く、自分の根幹にあるもの。ただ住んでいるだけではわからなかったことも、縁あって教育委員として携わる中で知ることもあり、地元とは違う木津川市独自の歴史や先端技術など、多様な地域性のある「木津川市」に、大変な魅力を感じている。そういったことにも教育委員にならなければ気づかなかったかもしれない。住んでいる地域の中だけでは気付かず過ごしていたと思う。今なら自分の子どもにも木津川市についていろいろ話すことができるが、外から来た大人である自分が、住んでいる地域の中だけではそういったことはできなかったと思う。木津川市が地元で、子どもの頃からずっと住んでいる方は木津川市の魅力について知っていると思うが、外からも木津川市の良さを知ってもらえるような、親子で取り組めるようなふるさと教育が展開できれば良いと思う。

谷口市長：ふるさと教育が地域へ情報発信する役割にもなる。長年住んでいると魅力が薄まったり、醸成されて高まったり、いろいろな思いがあるだろうと思う。

城野委員：地元木津川市に住んで60年以上になる。子どもの頃はプールもあったが木津川で泳いだり、知らず知らずのうちに文化財の中で遊んだりしていた。教員として働いている頃には学ぶ機会が少なかったが、退職してから学ぶ機会が増えてきていて、退職した教職員の研修で山城郷土資料館の研究員の方や町史編纂に携わった方などの話を聞くなど、改めて学ぶことが多くなっている。特に木津川市は奈良の都と全国をつなぐ要衝の地であり、物資が集まってきたことなども、学び直して改めてすごい地域だったと思っている。また万葉集には市坂の峠で詠んだ和歌があったり、普段通っているところが全国的に有名な場所だったということを改めて知る機会がある。しかし、そういったことは子どもたちに伝わりにくいと感じている。まずは教職員が面白さを感じて、今自分たちが住んでいる地域はすごいところだということを伝える方法がないものかと考えている。教員自身が学んで面白さを感じて、教材にしたいと思う気持ちを起こしていくことが大事なことであると思う。そのためには時間的なことや研修などの課題もある。学校全体で取り組む、他のクラスや学年とつながっていこうとすると、管理職の取り組む姿勢も必要になる。資料にもあるが、教員の負担になると取組につながらない。また特に小規模校では個人的に取り組むことが多く、人事異動によって取組が終わってしまう。そうならないようにチームとして取り組むこと、共有することが大事である。一つの学校だけではなく、例えば中学校区で近くの文化財について情報共有したり、教材化するなど何か手段をストックしておくことも大事である。またアニメなど発達段階に応じて上手に使用することも考えられる。

先ほど社会科副読本の話が出ていたが、その中でもサイトの紹介

や興味を持ったことについて、自分たちで検索できるような環境を整え、きっかけを作ることを教員が仕掛けていくこともできると思う。皆川委員の発言にもあった、親子イベントは保護者も参加しやすい。子どもたちが学校で学んだことを、こんな素敵な地域に住んでいると、家でも話すことができれば、保護者も興味を持つかもしれない。ふるさと教育へのきっかけ、機会づくりを学校をとおして広めていくことにつながる。まずは本人がやる気になることが最も大事なことである。また小学校で学んだことを中学校につなげていく。ステップアップして繋げていくことも大事なことである。小中学校で共有し、繋げて行ければ良いと思う。

谷口市長：ふるさと教育の意義、必要性や木津川市には魅力があるということが共通した認識のように思う。ただ、学校教育だけで終わってしまうと教員の負担が増加し、本末転倒になってしまう。地域を巻き込み、地域総がかりで、取り組んでいくことが必要である。そうすれば学校だけの活動で終わらない。資料にある具体的な活動事例を見ても、市長部局と教育部局の連携は必要であると思う。

次に市長部局にどんなフォローを求めるか、企業との協働関係などについて委員のアイディアを聞きたい。

雑賀教育部理事：学校現場にいと、ふるさと学習は子どもの教育という視点で考える。これまでの意見を聞いて、大人の学習機会であるとか、子どもたちが学んだことを大人にどのようなつながっていくのか。そういった視点は学校が持ちにくいところである。学校現場は子どもに教育をする。それが地域や大人につながり、また子どもに返ってくる仕組みが大事であると感じた。

谷口市長：あえて大胆な意見でもよい。教育委員の視点からの意見を聞きたい。

城野委員：恭仁宮跡が特別史跡に指定されたことで市立図書館でも力を入れて資料を公開したり、社会科副読本も置いていると思うが、さらにコーナーを作って、子どもたちが学習していることをアピールしたり、学校の中にも、そういったコーナーがあると、参観に来た保護者などが興味を持つきっかけになるのではないかなと思う。学校がフィールドワークに出かけやすい環境には何が必要かなど聞いて、積極的に出かけやすいように借り上げバスなど、予算の増額をお願いできるのか。また出前授業の活用も進めてほしい。取り組みやすい環境を整えて、教員がやる気になれば、それが子どもたちへ返ってくると思う。いろいろなことを考える機会があればいいのではないかなと思う。

皆川委員：恭仁宮跡のイベントに親子で参加して知ることができた経験もあるので、親子や家族で参加できるイベントがあればいいと思う。自分の子どもが参加しやすい祭りやイベントに大人も付き添って行く

ことで、おもしろいと興味を持ってもらえればよいと思う。図書館の話もあったが、自分自身は図書館を利用する機会が多い。用事で出かけた時についてふるさとのことを知って帰るなど、少しずつできることを積み重ねていけるようになれば良いと思う。

谷口市長：イベントや図書館に行く方は意識が高まると思うが、関心のない方をどのようにして巻き込んでいくかが課題である。

智原委員：企業とタイアップしたイベントの開催も良いと思う。自分自身、生活している中で得る情報はあがるが、副読本を読んで知識を得たいとも思う。

佐脇委員：子どもの頃を思い出すと、先生の雑談の中で地域のことに興味を持ったこともあった。今なら大阪万博で使用された残念石のことが話題になったが、その点でも幅広い視点で学習したと思う。どのようにして大阪まで運んだのか、木津川の水運のことなど、先生が雑談の中に入れるだけで、子どもの興味は変わってくると思う。休み時間など授業以外のところで、先生が話題にできるように興味を持ってもらえるような機会が増えれば、子どもたちへつながると思う。また保護者としても子どもから知り得る情報は多いので、家族の会話の中で地域のことを学べる機会ができるようにつなげられれば、良いと思う。数年前になるが、奈良国立博物館で南山城の特別展を開催された際、地域に特化した展覧会であるため、所蔵者の氏名だけではなく、地域を明記するようにした。そのことによりそれぞれの文化財がどこの市町村にあるのかが明確になり、興味を持つ一助になったのではないかと考えている。

谷口市長：どこまで興味を持って知っていただくかが大事なことだと思う。ふるさと木津川市のことを様々な面で知っていただく機会を設けられる取組ができればよいと思う。

竹本教育長：教員は様々な研修を受け、業務も多忙な中ではあるが、今以上に木津川市のことを様々な面で知っていただく機会を設けられるような取組ができればよいと思う。また、子どもたちが学んだことを家に持ち帰り、家族に学習したことを話すことで、保護者などにも広がると思う。現在は地蔵盆や地元の祭りなど、地域の方が地元で寄り集まる機会が減少している。昔であれば、そういった集まりに子どもも一緒に行って、自然と地域の方々と話したりしていたと思う。そういった記憶は成長しても残っているが、現在は機会が減少している。そんな機会をつくれる教育、まちづくりが大事になってくる。市や商工会で大きな祭やイベントを開催しているが、住んでいる地域に根差した祭などが必要であると思う。

新しく木津川市に住まれた方にはいろいろなことを知っていただきたい。あわせて、ずっと木津川市に住んでいる方にとっては身近に国宝や重要文化財といったものがあることが当たり前になり過ぎ

ている。そういった方にも、木津川市にはこんなすごいところがあると、あえて話をするように働きかけていくことが必要と思う。自分自身、この仕事をしていて初めて知ることもある。平城宮址の大極殿は恭仁宮の発掘調査を踏まえて建てられたことも、仕事を通じて初めて知ったことの一つである。そうやって知り得たことを、いろいろな機会に広めていくことが大事であると思う。

谷口市長：令和6年度に教育大綱を策定する際に、理念にある「ふるさと木津川市に愛着を持ち、未来につなげるひとづくり」にこだわった。人づくりとまちづくりは表裏一体であると思う。それぞれご縁があり、自分のルーツがあって木津川市に住んでいる。ふるさとを知り、誇りを持つことで自己肯定感が高まり、アイデンティティが固まっていく。そうなれば他者への思いやりや、人それぞれの考えがあるという思いも出てくると思う。そういった人はふるさとを出ても、自分の立ち位置を確立できる、自立した人になるように思う。つまりふるさと教育は、まちづくりだけではなくそれぞれの「ひと」に対しても重要な視点であると考えている。限られた時間の中ではあったが、市長部局との連携について意見を聞き、市長部局としてできること、伴走的なこととして補助金を支出したり、地域の活動を支援するなど、仕掛けていく必要があることを改めて認識した。主体的に行動できる人ばかりではない。関心がない方に仕掛けていく姿勢が必要であると感じた。改めて、ふるさと教育は大事な視点であると感じた。教育委員会と市長部局が連携して、全庁的な取組につなげていきたいと思う。

城野委員：恭仁宮跡が特別史跡に指定されたことを市民の方にわかりやすいように、道にのぼりをたてるとか、駅に案内を貼り出すとか、もっとしても良いと思う。全国でよくあるのは地域出身のタレントが観光大使として活躍している。ユーチューバーに地域を紹介してもらうことなども若者には効果的であると思う。

谷口市長：シビックプライドから対外的な発信は大事だと思う。

佐脇委員：国道163号線の歩道橋に垂れ幕を設置することを以前に提案している。

谷口市長：法律などを確認し、調整できることはしていきたい。教育大綱で定めた理念でもあるので、掛け声倒れにならないよう、取り組んでいきたい。

3 閉 会